写真で見るまつりの歴史

昭和25年、下組（1部落）は初の自作山車でまつりに参加。題目は「竜虎対決」

昭和25年に中組（2部落）が制作した自作山車。題目は「二宮金次郎」

昭和25年の上組（3部落）の初めての山車。題目は「加藤清正の虎退治」

昭和43年の三社祭の様子。鵜鳥（うのとり）神社の神楽衆を先頭に横町付近を練り歩いた

昭和25年「三社祭」が始まる

昭和13年、青年たちの手作り山車で盛り上がった「八幡宮まつり」は、第二次世界大戦などで中断を余儀なくされたという。

しかし、村社である「北股（きたのまた）神社」を改築したことから、まつり再開の声が上がり、昭和25年、下組（旧1部落）、中組（旧2部落）、上組（旧3部落）の3つの山車が出揃った。これに「鵜鳥（うのとり）神社」が加わり「三社祭」（鵜鳥神社、北股神社、八幡宮）が新たにスタートした。

上区の初代組頭を務めた嵯峨初三郎さん(82)は、アルバムを開き写真を眺めながら、当時の山車作りの様子を語った。

「昭和25年、私は23歳で、3部落の青年会長だったんですよ。2部落は三船泰弘さん（故人）で、私と三船さんが組頭になって中組、上組として、この年にそれぞれ山車を作ったが。

最初は旧診療所前にあった林下市太郎さん（故人）のところを借りて山車を作り、それから十数年後には自分の鉄工所の敷地内で作ったもんです。25年間まつりにかかわりました。本当にまつりが好きだったよ」と振り返る。

「花屋台山車」や「トラック山車」も登場

下組3代目組頭を務めた旭（あさひ）日区の野田口光徳さん(72)は当時のことをこう話してくれた。

「下組が山車を初めて作ったのは確か昭和25年でながったがなぁ。当時は川向幸作さん（故人）と中野四郎さん（故人）が中心になって始めた記憶があんが。あのころは青年たちがまつりの1カ月ぐらい前から集まって山車を作ったなぁ。

その時『竜虎対決』という山車を作ったども、三船仁太郎さんに『これはヘビとネコがぁ』とからかわれでさぁ。まあ1回目だし『来年は頑張ろう』ってみんなでしゃべった記憶があんなぁ。とにかく、まつりは『ばが』になん若いもんがいないば、できないもんだがぁ」。

それから下組・中組・上組とも毎年山車のテーマ、装飾などに趣向を凝らし、「三社祭」は継続されていった。山車は年々豪華になっていったが、長い歴史の中には山車の上で踊りを踊る「花屋台山車」や、台車の代わりに大型トラックの上に人形などを乗せた「トラック山車」なども登場した。

しかし、すべてが順調に進んでいるわけではなかった。

昭和36年にお目見えした通称「花屋台山車」。女性が中央で踊ったという

昭和44年には、トラックの荷台に飾り付けをした通称「トラック山車」も登場。堀内方面にも行ったという

広報ふだい

好天のふだいまつり

初日に1万人の人出

始まって以来のにぎわい

昭和49年10月号の「広報ふだい」の記事。この年に「ふだいまつり」となり9月21、22、23の3日間行われた。そして翌年の昭和50年から秋分の日を中日にした3日間を恒例とした

まつりの危機 青年が都市へ流出

昭和36年、日本は高度経済成長期に突入し、村の青年たちも都市部へ流出した。山車作りに欠かせない青年の流出は山車組にとって大きな問題だった。そうした中、中組と上組は1年交替でお互いが協力し合い、山車を存続させることを取り決めた。

不運はさらに訪れた。久慈市から頼んでいた人形師が亡くなり、山車作りができなくなった。そこで山車組では現在日本一の山車まつりと称される青森県八戸市から山車を借り受け「三社祭」の継続を図ることにした。この借用は2年続いた。

こうした中、久慈市でも八戸市の山車組から借り受けることになり、そこで山車は8月初旬に八戸市で開催される「三社大祭」終了後に久慈市の山車組で、「久慈秋まつり」終了後、その山車を村の山車組が借り受ける方法を取ってきた。この方法は昭和48年まで続いた。

「三社祭」から「ふだいまつり」へ

昭和49年、観光に力を入れていた村は、まつりを観光のひとつの目玉にしようと考えた。そこで各山車組と地区の人たちが自主的に続けてきた「三社祭」を「ふだいまつり」と改め、村と商工会が主導となり「観光まつり」の色合いを全面に出し、9月21日からの3日間、盛大に行った。

同年10月号の「広報ふだい」にはその様子を「好天のふだいまつり初日に1万人の人出」と紹介している。そのときの内容をみると、初日に仮装行列、婦人会団体踊り、鵜鳥神楽、みこしお通り、山車運行、鹿踊り。中日に相撲大会、のど自慢大会。最終日はみこしお帰り、山車運行、盆踊り大会、路上演奏など盛りだくさんだ。しかし、時代とともにこの内容も少しずつ変化していくことになる。

平成14年からは「ふだいまつり」を「久慈秋まつり」より2週間早めたことから、今まで久慈市から運んでいた山車を、村の山車組では八戸市まで出向き、交通量の少ない真夜中に6時間ほどかけて運んだ。

村のまつりはこうした変遷をたどり現在の形（山車2台、みこしのお通り・お帰り、郷土芸能発表会）になってきた。

しかし、毎年華やかに繰り広げられる「ふだいまつり」だが、道路事情の複雑さから山車を借り受ける際の運搬上の問題で新たな局面を迎えていた。